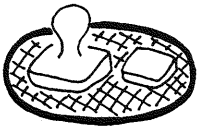
巻頭言

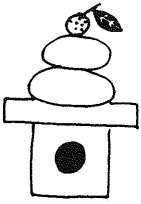
「子どもの存在意義」の確認のために

本田　和子

「子ども」は、人と社会にとってどんな意味をもつのだろうか。私たちはこれまで、「子ども」という存在にどのような価値を付与し、どのように位置づけていたのだろうか。

合計特殊出生率が二・〇を下回って以来、下降現象は止まるところを知らない。行政レベルの懸命な対応をよそに、一方的に進行する少子化現象は私たちの予測を超え、このままでは、私たちの未来に「子ども」のいない社会が訪れるのではと、いささかならず不安に陥れられもする。いま、私たちの社会に、そして、私たち人間の生殖活動に関して、何

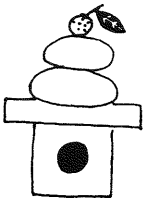




が起こっているというのだろうか。仮に「子どものいない社会」が到来するとして、そのような社会を私たちはどう生きることが可能だろうか。

少子化は、しばしば巷間で話題とされるように、将来の労働力や納税人口、さらには、年金負担世代の激減など、次代の経済問題としてのみ論じられるべきものではない。それは、「子ども存在」そのものにかかわる問題、たとえば、時代の「子ども観」や「子ども」と「大人」の関係にかかわる問題であり、また、子どもたちの人間観・世界観や子ども相互の結び付きにかかわる問題でもある。私たちの時代は、そして次代は、「子どもという存在」に対して、従来と同じ関係の結び手として向き合うことが出来るのだろうか。もし、関係の更改が必要ならば、それはどのような方向性において試みられねばならないのだろうか。

少子化の原因が、様々に語られている。たとえば、育児と教育に要する費用の膨張という経済的な問題、たとえば、女性の仕事と育児の両立の困難さ、あるいは、子ども問題の頻出する現在、育児に自信がもてない、等々……、なかには、子どもたちの生きていく未来社会の暗さをあげる人たちもいる。これらはいずれも、一面の真理に相違ない。調査結果は教育費の高騰を示しているし、待機児童は依然減りそうもなく、育児に自信喪失の若い母親の嘆きも相変わらずである。そして、財政・外交・生活あるいは環境問題等、地球

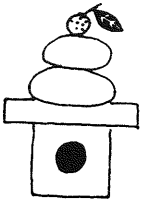


の未来もなかなか明るくはならないのである。

しかし、それらにもまして、僅かずつではあるが「子ども忌避」の心性が増大しつつある気配に注目させられる。あるいは、自分たちの人生設計に「子どもは入っていない」と感じている若い人たちの出現というべきだろうか。自分一人、あるいは自分たちカップルが、とにもかくにも、平穏で豊かに格別の困難もなく、一生を過ごせればよいという考え方の所有者が増えつつあるらしいのだ。

私はかねてから、極端な少子化と忌避の心性は、互いに相関し合うのではないかと指摘してきた。子どもと触れる機会の乏しさが、結果として子ども忌避を生む？　あるいは、子どもを忌避する心性が、少子化をエスカレートさせる？　いずれにしても、少子化は、「子ども」を、人の一生にとって不可避の存在とみなす心性からは遠い。そして、子どもを、自分たちで操作可能な私有物とみなす限り、この心性を完全に払底することは難しい。

子どもは、「見知らぬ世界からの贈り物である」とみなす心性は、人々のなかに蘇る力をもたないのだろうか。かつて「子ども」とは、神仏からの授かり物であり、コウノトリの運んでくる物でもあった。つまり、子どもをもつとは、人の想いを超えた出来事だということであった。



科学および科学技術の力は、生命の出現のありようも、人の生成に関しても、かなりの程度に詳細な科学的解明を試みてみせる。そして、死を超克しようとする医療技術は、人の生命をも人為的に操作可能なものとなる日が訪れていると告げてもいる。もしかしたら、最低必要な次世代継承者くらい、人工的に産出し、人工的に育成することが可能となるのではないか。とすれば、個々人が、子どもを産み育てる営みと、それに託された人類の継承という意味は喪失しよう。一部の若い人たちの「個々人の人生に子どもは必要がない」という呟きは、時代を先取りしているのでもあろうか。

育児手当などによる産むことの奨励も、保育所の増設等育児に関する利便性の提供も、いずれも無駄ではなく、間違いなく現実的で有効な対策ではあろう。しかし、根底から問い直すことが必要なのは、「子どもが存在するそのこと」の意味であり、また、「子ども存在の脱近代」、それは「脱科学化」でもあるのだが、それらによるまなざしの更新にほかならない。すなわち、子どもの誕生や育児に伴う神秘、すなわち、子どもとの遭遇によって出現する人為を超えた出来事の神秘性と超越性に気付き得る感受性と、これらを基調とした子ども―大人関係の回復であろう。子ども忌避の心性からの脱却とは、「子ども」にまつわる人為万能の現状を問い直し、彼らが存在することの意味を確認し直すことから始まるのではないだろうか。